



国立大学法人北海道国立大学機構

帯広畜産大学

概要2023



理事長挨拶

2022年4月1日、国立大学法人北海道国立大学機構が誕生しました。小樽・後志・帯広・十勝・北見・オホーツクと北海道の広域で、商学、農畜産学、工学分野の特色ある教育研究を展開してきた小樽商科大学、帯広畜産大学、北見工業大学が三国立大学法人の経営統合という全国初の試みを実現しました。

大学は教育研究を担当する教学部門と法人運営を担当する経営部門が両輪となって、はじめて前進します。北海道国立大学機構は三国立大学の教育研究連携をリードして「実学の知の拠点」を形成し、合わせて産学官金連携によって北海道経済・産業の発展と国際社会の繁栄、持続可能な社会の実現に貢献することを目指しています。この目標を達成するために、自己資金の獲得など経営努力による財政基盤の強化、三大学の連携による分野横断、分野融合型の教育研究プロジェクトの創設、IT、AIを活用した教育研究の高度化、DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進による法人運営の効率化と働き方改革を柱とする改革を進めます。

近年、気候変動や大規模災害、食料、格差、紛争など地球規模の課題が顕在化してきましたが、これに加えて新型コロナウイルス感染症の拡大を契機に、社会は大きく変化しつつあります。必要に迫られて始めた対面とオンラインのハイブリッドな教育や法人運営ですが、地理的制約を超えた大学の広域連携、教育研究におけるイノベーションの創出、そして働き方改革によって人々が豊かな人生をデザインできる可能性を秘めています。デジタルとアナログが融合する新しい教育研究の展開によって、氾濫する情報に惑わされず物事の本質を見抜く強靱な思考力と想定外の事態に対応する独創性を備えた人材を育成し、食料、エネルギー、防災、経済格差などの地球規模の課題に取り組む先端研究を通じて、社会的なイノベーションの創出に貢献することができます。

18歳人口の減少や産業構造の変化など、解決すべき課題はありますが、食糧自給率約200%、風力、太陽光発電など新エネルギー導入ポテンシャル日本一、農林水産・観光資源に恵まれ、都道府県魅力度ランキング日本一の北海道は、大学生が豊かな学生生活を送り、研究者が世界から集う「知の拠点」にふさわしいエリアであり、大学と地域が連携することで輝かしい未来が開けます。

地域とともに歩み、地域とともに発展する北海道国立大学機構の挑戦は今、始まったばかりです。

皆様のご指導と温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。



国立大学法人北海道国立大学機構
理事長 長谷山 彰

INDEX

- | | | | |
|----|---------------------|----|-------------------|
| 1 | 理事長挨拶・学長挨拶 | 13 | 動物医療センター |
| 3 | 沿革 | 14 | 動物・食品検査診断センター |
| 4 | 歴代校長・学長 | 14 | 大学情報分析室 |
| 5 | 組織図 | 14 | 農学情報基盤センター |
| 5 | 役職員 | 14 | 実験動物施設管理室 |
| 6 | 畜産学部 | 14 | 獣医学教育国際認証推進室 |
| 9 | 大学院 | 15 | 附属図書館 |
| 10 | 別科 | 15 | 保健管理センター |
| 11 | グローバルアグロメディシン研究センター | 15 | 大学教育センター |
| 11 | 原虫病研究センター | 15 | イングリッシュ・リソース・センター |
| 12 | 産学連携センター | 16 | 国際活動 |
| 12 | 高度人材共創センター | 18 | 社会貢献 |
| 13 | 畜産フィールド科学センター | | |

学長挨拶

本学の前身である帯広高等獣医学校は、1941年に、地域の多大な支援を得て設立されました。その後、1949年に新制大学として帯広畜産大学が設置され、教育研究機能を着実に強化しながら北海道農業の発展と共に歩んできました。これまでに送り出した卒業生・修了生は帯広高等獣医学校時代から数えて約1万8千人となり、多くのOB・OGと地域の皆様方に支えられて今日を迎えています。

十勝平野に位置する本学の西には日高山脈、北には大雪山系があり、それらの裾野は十勝川に沿って太平洋沿岸まで南へ広がっています。地平線を望むことのできる広大な十勝平野と太平洋沿岸の豊かな漁場を有するこの雄大な自然環境は、北海道の中でも特に素晴らしいものです。同時に、この自然環境と大陸的な気候は、十勝の基幹産業である畜産、酪農、畑作にも大きく寄与すると同時に、本学の教育研究を進める上で、大きな強みとなっています。

日本の食料生産の中心地として、「生産から消費まで」一貫した環境が揃う十勝に位置する本学は、生命、食料、環境をテーマに、農学、畜産科学、獣医学に関する教育研究を推進する、我が国唯一の国立大学です。本学のミッションは、「知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、『食を支え、くらしを守る』人材の育成を通じて、地域及び国際社会に貢献すること。」です。

そして、2022年4月1日に、帯広畜産大学、小樽商科大学、北見工業大学の3大学経営統合による国立大学法人北海道国立大学機構が発足しました。本機構は農学、商学、工学を担う国立大学の結束と産学官金の強力な連携により、北海道経済・産業の発展と国際社会の繁栄に貢献することを目標としています。

農業活動によって生み出される食料は、人類の生命維持はもとより健康で充実した生活の根幹を支えるものです。また、あらゆる地球規模課題に農業は深く関わっています。気候変動、大規模災害、新興感染症、国際紛争等の脅威が拡大している現代社会において、「食と農」を取り巻く環境は大きく変化しつつあり、農学分野が解決すべき課題は一層複雑化・多様化しています。

本学は北海道国立大学機構の一員として、異分野融合の取組を三大学で協力して推進するとともに、地域、産業界、関係機関等と協働で社会の変化に対応した教育研究活動を推進し、新たな時代を担う農学系人材を育成します。



帯広畜産大学長 長澤 秀行

資料編

- | | |
|------------------------|-----------|
| 21 職員数 | 29 配置図 |
| 21 学生の定員・現員 | 30 校地及び建物 |
| 22 外国人留学生 | |
| 23 国際交流協定締結大学 | |
| 24 入学者数 | |
| 25 卒業生及び修了者数・進路状況 | |
| 27 学生寮・国際交流会館・福利厚生施設 | |
| 27 学生支援(奨学金) | |
| 28 令和5年度収入・支出予算(支出区分別) | |
| 28 科学研究費補助金等 | |
| 28 外部資金受入額 | |

沿革

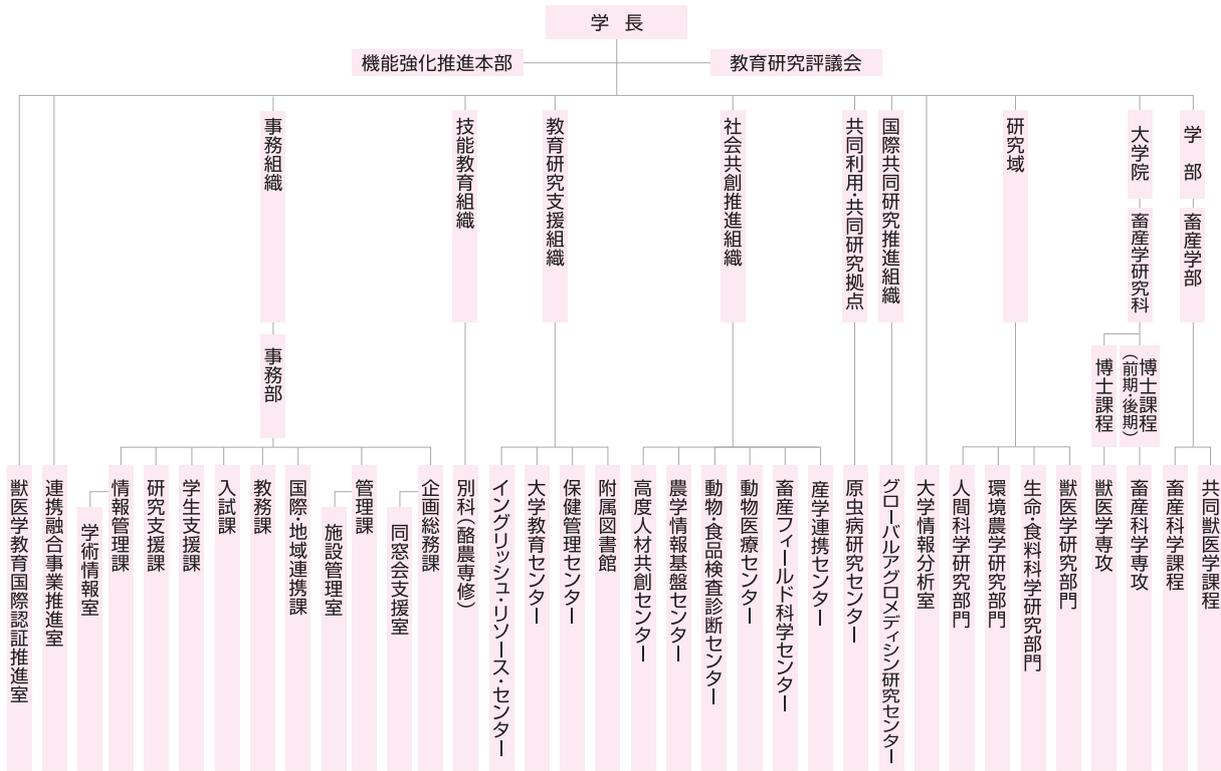
- 1941. 4. 1 帯広高等獣医学校創立
- 1944. 4. 1 帯広獣医畜産専門学校と改称
- 1946. 4. 1 帯広農業専門学校と改称
- 1949. 5.31 帯広畜産大学設置(学科を獣医学科・酪農学科とし、帯広農業専門学校を包括)
- 1949. 5.31 附属農場、附属図書館設置
- 1953. 4. 1 総合農学科設置
- 1953. 8. 1 附属家畜病院設置
- 1960. 4. 1 別科(草地畜産専修)設置
- 1961. 4. 1 農産化学科設置
- 1963. 4. 1 農業工学科設置
- 1964. 4. 1 草地学科設置
- 1966. 3.31 総合農学科廃止
- 1967. 6. 1 帯広畜産大学大学院畜産学研究科修士課程設置(獣医学専攻・酪農学専攻・農産化学専攻)
- 1969. 4. 1 大学院畜産学研究科に農業工学専攻・草地学専攻(いずれも修士課程)を設置
- 1969. 4. 1 保健管理センター設置
- 1972. 4. 1 畜産経営学科設置
- 1974. 4. 1 畜産環境学科設置
- 1975. 9. 2 放射性同位元素実験室設置
- 1976. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産経営学専攻(修士課程)を設置
- 1978. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産環境学専攻(修士課程)を設置
- 1978. 4. 1 酪農学科を家畜生産科学科に改組
- 1982. 4. 1 大学院畜産学研究科の酪農学専攻(修士課程)を家畜生産科学専攻(修士課程)に改組
- 1990. 4. 1 家畜生産科学科、農産化学科、農業工学科、草地学科、畜産経営学科、畜産環境学科を畜産管理学科、畜産環境科学科、生物資源化学科に改組
- 1990. 4. 1 大学院畜産学研究科の獣医学専攻(修士課程)を廃止
- 1990. 4. 1 岐阜大学大学院連合獣医学研究科博士課程に構成大学として参加
- 1990. 6. 8 原虫病分子免疫研究センター設置
- 1992. 2. 1 情報処理センター設置
- 1994. 4. 1 岩手大学大学院連合農学研究科博士課程に構成大学として参加
- 1994. 4. 1 大学院畜産学研究科の家畜生産科学専攻、農産化学専攻、草地学専攻、農業工学専攻、畜産経営学専攻及び畜産環境学専攻(いずれも修士課程)を畜産管理学専攻、畜産環境科学専攻、生物資源化学専攻(いずれも修士課程)に改組
- 1996. 5.11 地域共同研究センター設置
- 1997. 4. 1 生物資源化学科を生物資源科学科に改組
- 2000. 4. 1 原虫病分子免疫研究センターを廃止し、原虫病研究センターを設置
- 2001. 4. 1 大学院畜産学研究科の生物資源化学専攻(修士課程)を生物資源科学専攻に改称
- 2002. 4. 1 学部教育センター設置
- 2002. 4. 1 畜産管理学科、畜産環境科学科、生物資源科学科を畜産科学科に改組
- 2002. 4. 1 附属農場を廃止し、畜産フィールド科学センターを設置
- 2002. 8. 1 大動物特殊疾病研究センター設置

- 2004. 4. 1 国立大学法人帯広畜産大学設置
- 2004. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産衛生学専攻(独立専攻)(修士課程)設置
- 2004. 4. 1 学部教育センターを大学教育センターに改称
- 2006. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産衛生学専攻(博士後期課程)設置
- 2008. 4. 1 獣医学科、畜産科学科を獣医学課程、畜産科学課程に改組
- 2009. 4. 1 附属家畜病院を動物医療センターに改称
- 2009. 4. 1 イングリッシュ・リソース・センター設置
- 2010. 4. 1 大学院畜産学研究科の畜産管理学専攻、畜産環境科学専攻、生物資源科学専攻(いずれも修士課程)を畜産生命科学専攻、食品科学専攻、資源環境農学専攻に改組
- 2010. 4. 1 地域共同研究センターを地域連携推進センターに改組
- 2010. 4. 1 大動物特殊疾病研究センターを動物・食品衛生研究センターに改組
- 2012. 4. 1 帯広畜産大学畜産学部と北海道大学獣医学部との「共同獣医学課程」を設置
- 2014. 4. 1 動物・食品衛生研究センターを動物・食品検査診断センターに改組
- 2015. 4. 1 大学情報分析室設置
- 2015. 4. 1 グローバルアグロメディシン研究センター設置
- 2016.11.16 共用機器基盤センター設置
- 2018. 4. 1 大学院畜産学研究科の畜産生命科学専攻、食品科学専攻、資源環境農学専攻(いずれも修士課程)及び畜産衛生学専攻(博士前期課程・博士後期課程)を廃止
- 2018. 4. 1 畜産科学専攻(博士前期課程・博士後期課程)及び獣医学専攻(博士課程)を設置
- 2018. 4. 1 岩手大学大学院連合農学研究科博士課程の構成大学から離脱
- 2018. 4. 1 岐阜大学大学院連合獣医学研究科博士課程の解消
- 2019. 4. 1 地域連携推進センターを産学連携センターに改組
- 2019. 4. 1 共用機器基盤センターを廃止し、産学連携センターに機能を集約
- 2020. 4. 1 別科(草地畜産専修)を別科(酪農専修)に改組
- 2020.10. 1 情報処理センターを農学情報基盤センターに改組
- 2022. 4. 1 小樽商科大学及び北見工業大学と経営統合し、国立大学法人北海道国立大学機構を設置
- 2023. 7. 1 高度人材共創センター設置

歴代校長・学長

名 称	氏 名	就任年月日	名 称	氏 名	就任年月日
帯広高等獣医学校	宮 脇 富	1941. 4. 1	帯広畜産大学	坂 村 貞 雄	1990. 3. 1
帯広獣医畜産専門学校	宮 脇 富	1944. 4. 1		久 保 嘉 治	1996. 3. 1
帯広農業専門学校	宮 脇 富	1946. 4. 1		佐々木 康 之	2000. 3. 1
帯広畜産大学	宮 脇 富	1949. 5.31		鈴 木 直 義	2002. 1. 1
	小華和 忠 士	1953. 9. 1	国立大学法人 帯広畜産大学	鈴 木 直 義	2004. 4. 1
	田 所 哲太郎	1958. 1.10		長 澤 秀 行	2008. 1. 1
	山 極 三 郎	1962. 1.10		奥 田 潔	2016. 1. 1
	大 原 久 友	1970. 3. 1		国立大学法人 北海道国立大学機構 帯広畜産大学	長 澤 秀 行
	西 川 義 正	1976. 3. 1			
	鈴 木 省 三	1984. 3. 1			

組織図



役職員

学長・副学長等

学長	長 澤 秀 行
副学長	古 林 与志安
副学長	仙北谷 康
副学長	中 野 昌 明
学長補佐	井 上 昇
学長補佐	渡 邊 芳 之
学長補佐	小 池 正 徳
学長補佐	岩 本 博 幸
学長補佐	川 島 千 帆
学長補佐	野 並 雅 章

センター長等

大学情報分析室長	岡 部 康 成
グローバルアグロメディシン研究センター長	宮 本 明 夫
原虫病研究センター長	河 津 信 一 郎
産学連携センター長	岡 田 繁
畜産フィールド科学センター長	小 池 正 徳
動物医療センター長	南 保 泰 雄
動物・食品検査診断センター長	石 井 利 明
農学情報基盤センター長	口 田 圭 吾
高度人材共創センター長	岩 本 博 幸
附属図書館長	渡 邊 芳 之
保健管理センター長	川 畑 秀 伸
大学教育センター長	仙北谷 康
イングリッシュ・リソース・センター長	Marshall Smith
獣医学教育国際認証推進室長	古 林 与志安

部門長・別科主任

獣医学研究部門長	佐々木 基 樹
生命・食料科学研究部門長	木 下 幹 朗
環境農学研究部門長	押 田 龍 夫
人間科学研究部門長	渡 邊 芳 之
別科主任	西 田 武 弘

専攻長

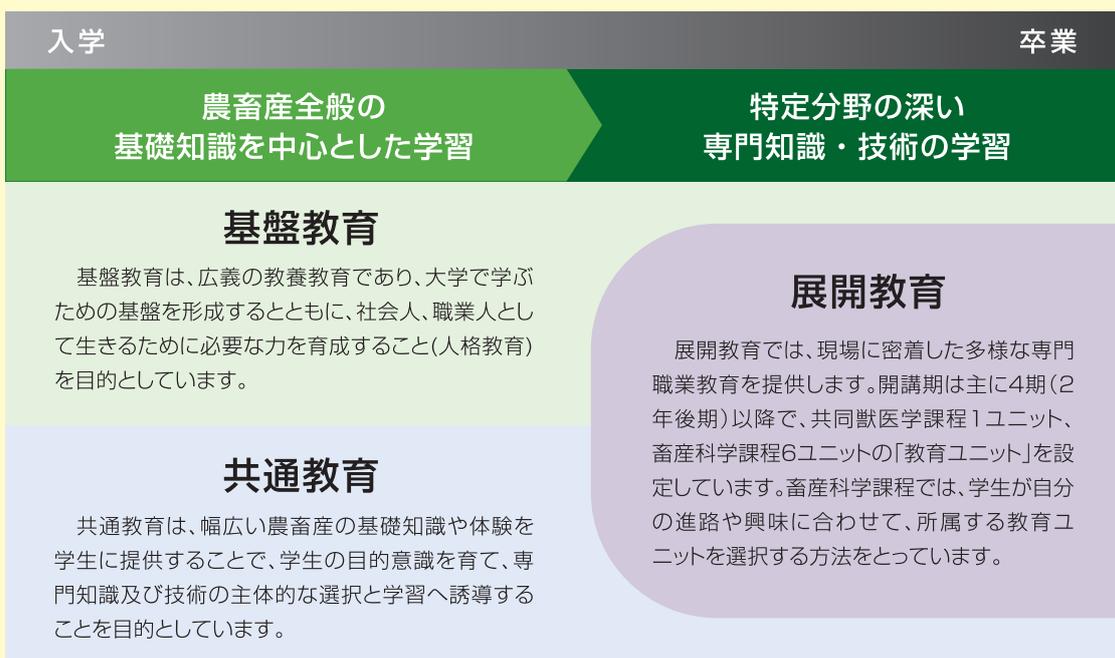
畜産科学専攻長	木 下 幹 朗
獣医学専攻長	石 川 透

事務部

事務部長	舩 川 正 晃
執行役	道 見 康 文
企画総務課長	川 崎 勇 二
企画総務課同窓会支援室長	野 並 雅 章
管理課長	佐 藤 康 幸
管理課施設管理室長	成 田 芳 道
国際・地域連携課長	舩 川 正 晃
教務課長	小 田 賢 一
入試課長	千 日 坂 和 彦
学生支援課長	佐 藤 健 一
研究支援課長	長 谷 川 祐 希
情報管理課長	大 坪 秀 典
情報管理課学術情報室長	大 平 依 理 子

アドバンス制教育システム

「アドバンス制」とは、「基盤教育」「共通教育」「展開教育」の3つの教育分野から成り、下級学年では大学で学ぶための基礎となる農畜産の幅広い知識や技術を学習(基盤教育・共通教育)し、上級学年に進むにつれて特定分野の深い専門知識・技術の学習(展開教育)へと前進(アドバンス)していく教育課程です。特に畜産科学課程では、入学時には専門分野を決定せず、基礎知識を学習し理解を進めながら、それぞれの学ぶ専門分野(ユニット)を選択していくという方式をとっています。



全学農畜産実習・演習の概要

全学農畜産実習(共同獣医学課程では農畜産演習)は、「Farm to Table」に対応した広い視野の知識を提供する必修科目として開設しています。また、この科目は本学新入生全員が参加するカリキュラムとなっており、実際に「作物栽培」「乳肉食品生産」「家畜管理」を通して「生命を育み生命を食す」ことの大切さ、難しさなどを体験することで、専門職業人としての必要な見識を培うことができます。



乗馬実習



ジャガイモの収穫実習

共同獣医学課程

平成24年度入学者から本学と北海道大学は、共同獣医学課程を編成し、それぞれの優位な教育施設・教育資源を相互に利活用した実践的かつ先進的な獣医学教育を行っており、令和元年12月にはEAEVE(欧州獣医学教育機関協会)の認証を取得し、本教育が世界水準にあり、国際通用性を有することが証明されました。

獣医学ユニット

- | | |
|---|---|
| <p>① 獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけるための教育を実施します。</p> | <p>② 動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越した知識・技術を身につけるための教育を実施します。</p> |
| <p>③ 安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識・技術を身につけるための教育を実施します。</p> | <p>④ 最先端の生命科学研究に触れ、生命現象の新たな発見や医薬品の開発などにおいて獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力を身につけるための教育を実施します。</p> |

EAEVE(欧州獣医学教育機関協会)の認証取得

本学と北海道大学による共同獣医学課程は、令和元年7月にEAEVEによる公式診断を受審し、同年12月に完全認証を取得しました。EAEVE認証取得は、実施する獣医学教育が欧州水準にあり、国際通用性を有することを意味します。

EAEVE認証では、7年毎の再審査が必要であり、審査内容は定期的に修正されます。そのため、EAEVE認証の維持には継続的な教育改善への取組みが必要となります。本課程は、今後も獣医学教育の更なる改善のため、認証の維持を目指すとともに、認証取得の過程で得た経験と知識を他大学に還元し、我が国の獣医学教育の継続的な教育改革に貢献していきます。



EAEVE 認定証

畜産科学課程

畜産科学課程は、獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する専門職業人の育成を目的としています。

家畜生産科学ユニット

家畜の飼養管理、繁殖や改良、乳肉の生産についての知識と技術を修得するための教育を実施します。

農業経済学ユニット

経済学や経営学を主とする社会科学的なものの見方や調査に基づき、農畜産の生産、加工、流通、消費に関わる諸問題を的確に把握するための教育を実施します。

環境生態学ユニット

多様な生物群からなる生態系の仕組み及び農畜産環境とその周囲を取り巻く自然環境を理解するための教育を実施します。

農業環境工学ユニット

農業農村工学や農業システム工学に基づく先進的農業と環境保全を両立させるために必要な技術体系を学ぶための教育を実施します。

食品科学ユニット

食品の一次機能(栄養成分とエネルギー)、二次機能(おいしさや食感)及び三次機能(生体調節や健康)を学ぶための教育を実施します。

植物生産科学ユニット

植物生産を支える土壌と病害虫を含めた栽培環境から、その環境で育つ作物の生理、生態及び育種を総合的に理解するための教育を実施します。

教育プログラム(畜産科学課程)

■学際教育プログラム

<p>国際教育プログラム (International Studies Program)</p>	<p>現代社会では、国際事情・諸外国との関係、外国人との交流等を重要視しなければなりません。また、獣医・農畜産学分野は、地球規模課題である食料安全保障、環境問題、エネルギー問題、感染症等と密接に関連します。本学畜産学部では、各専門ユニットの教育科目において国際的視野を醸成するための教育を実践しますが、更に、学部卒業後又は大学院進学・修了後に国際舞台で活躍したいと考えている学生を対象に、外国人との高いコミュニケーションスキルの習得や開発途上国の獣医農畜産事情等を深く理解するために効果的な科目を履修するモデル「国際教育プログラム」を用意し、サポートする体制をつくっています。</p>
<p>大学院進学プログラム (Pre-Graduate Course Program)</p>	<p>本学大学院進学を目的としたプログラムで、英語科目5科目10単位(English I~V)をA⁺以上で修得、またはTOEICのスコア650以上を目指します。TOEICのスコア650以上(出願締切日から過去2年度以内に取得したものに限る。)の場合は、本学大学院入学試験の外国語試験は免除されます。</p> <p>また、英語の要件を3年次後期までにクリアした場合、大学院の授業科目2科目(4単位)を4年次に履修することができます。修得した科目の単位は、本学大学院入学後に、修了要件となる単位として認定できます。</p>
<p>動物医科学コース 進学プログラム (Veterinary Life Science Program)</p>	<p>本学大学院畜産科学専攻博士前期課程「動物医科学コース」への進学を目指す学生のためのプログラムで、大学院入学前に、あらかじめ家畜を含めた動物一般の疾病やその診断・治療、また体の仕組みや調節機構を学ぶための基礎となる基礎生物学や農畜産学を身に付けることを目的としています。</p> <p>本プログラムでは、英語科目5科目10単位(English I~V)をA⁺以上で修得、またはTOEICのスコア650以上を目指すことに加え、「動物医科学入門(1単位)」と指定された共通教育基礎・発展科目7科目から6単位以上修得することを目指します。</p> <p>なお、TOEICのスコア650以上(出願締切日から過去2年度以内に取得したものに限る。)の場合は、本学大学院入学試験の外国語試験は免除されます。</p>

■三大連携文理融合プログラム(令和4年度入学者以降)

<p>スマート農畜産業 プログラム</p>	<p>スマート農業は、ロボット技術、ICT(情報通信事業)、AI(人工知能)、IoT(モノのインターネット)等の先端技術を活用して超省力化や生産物の品質向上を可能にする新しい農業のことで、農業従事者の高齢化・後継者不足に伴う労働力不足をはじめ、耕作放棄地の増加や食料自給率の低下など、日本農業が抱えるさまざまな課題を解決し成長産業化する試みです。本プログラムでは、農学・畜産学の基本科目をベースにICT、AIおよびIoT等の農畜産学先端技術の実習科目を履修することにより、新たな農畜産業システムを考案・構築しうる人材を養成します。</p>
<p>アントレプレナーシップ プログラム (小樽商科大学)</p>	<p>産業・経済の活性化を最優先課題とする北海道において、資源や地域特性を理解し、多分野の知識を得るとともに、地域・企業等における新規事業開発や組織マネジメントなど広く「革新」を実行しうる意識(アントレプレナーシップ)と能力を身につけることで、北海道の産業と経済の活性化に資する将来のビジネス・リーダー及びビジネス・イノベーターを育成することを目的としています。</p>
<p>スポーツ・健康 プログラム (北見工業大学)</p>	<p>医療工学、生体工学、スポーツ工学などの専門知識・技術のみならず、栄養学、食品学に関する専門知識・技術を身につけることで、スポーツと健康を関連したものとして理解を深めます。さらに、経営や流通に関する専門知識・技術を身につけることで、新たな技術や製品の開発等、スポーツ・健康産業にも対応可能な展開力と実践的能力を養います。</p>

大学院

より先端的な学習と高度な技術の修得のために大学院教育があり、大学院畜産学研究科に、畜産科学専攻博士前期課程及び博士後期課程、並びに獣医学専攻博士課程が設置されています。また、畜産科学専攻には獣医・農畜産融合分野の学位を取得するための「畜産衛生学位プログラム」が設置されています。

畜産学研究科畜産科学専攻（博士前期課程、博士後期課程）

獣医・農畜産融合の視点から、食の安全確保をはじめとするグローバル化した多様な農畜産に関する課題の解決に取り組むことができる、高度専門職業人、教育者及び研究者を養成します。

▶▶▶ 博士前期課程

学部畜産科学課程の専門教育プログラムである6ユニットに対応した6コースを配置することにより学部教育との接続を円滑に行うと共に、同課程の教育ユニットにはない、獣医学に基礎を置く「動物医科学コース」を配置し、獣医、農畜産融合分野の教育体制を充実させています。これにより、獣医・農畜産学に関する課題解決能力と幅広い見識を備えた人材を育成します。

食品科学コース ⇒ 学位:修士(農学)

農畜産物を原料とした食品の製造・加工及びその機能性・安全性に関する広範かつ最新の知見や技術を提供し、食品業界・バイオ産業において活躍できる人材を養成します。

動物医科学コース ⇒ 学位:修士(動物医科学)

獣医師養成以外の学士課程卒業生を対象に、動物医科学に関する知識と技術を提供し、動物に関する知識を社会に還元できる人材を養成します。

農業経済学コース ⇒ 学位:修士(農学)

農業経済を中心とする社会科学的視点から俯瞰できるような専門教育を提供し、フードシステムにおける特定課題の解決に向けた実践的方策を提示することができる人材を養成します。

家畜生産科学コース ⇒ 学位:修士(農学)

家畜をはじめとする動物の生体機能、育種、繁殖、栄養、管理等に関する広範かつ体系的な知識と技術を提供し、畜産・生命科学分野の問題に対応できる人材を養成します。

農業環境工学コース ⇒ 学位:修士(農学)

農業生産技術と環境保全を両立させるための技術体系に関する先進的な専門教育を提供し、農業農村工学分野や農業機械システム学分野で活躍できる人材を養成します。

環境生態学コース ⇒ 学位:修士(農学)

農畜産環境とそれを取り巻く自然環境に関する広範かつ体系的な知識と技術を提供し、環境の保全、管理、利用に関する問題に対応できる人材を養成します。

植物生産科学コース ⇒ 学位:修士(農学)

作物生産を支える土壌管理から作物の育種と栽培、病害虫管理及び草地利用までに関する知識と技術を提供し、農畜産業の基盤づくりを担うことができる人材を養成します。

▶▶▶ 博士後期課程 ⇒ 学位:博士(農学)

農畜産学分野に関する「獣医・農畜産学融合」教育を提供し、食と農のグローバル化を背景にした専門的知識及び創造性と、優れた研究開発能力及び教育能力を備えた教育者・研究者を養成します。

▶▶▶ 畜産衛生学位プログラム ⇒ 学位:修士(畜産衛生学)／博士(畜産衛生学)

本学位プログラムは、企業等に求められている国際安全衛生基準の取得・維持に対応できる人材を育成するため、所属するコースに限定されることなく畜産科学専攻の全ての学生が「食の安全確保」に関する高度な専門教育を履修可能なプログラムです。本プログラムでは、優れた実践力及び応用力を身につけた畜産衛生の専門家を養成し、その専門性に相応しい「修士(畜産衛生学)」又は「博士(畜産衛生学)」の学位を付与します。

畜産学研究科獣医学専攻(博士課程)

▶▶▶ 博士課程 ⇒ 学位:博士(獣医学)

獣医学分野における最新の知識と技術を駆使した先端研究を担うことができる人材や、伴侶動物・産業動物及び野生動物を対象として高度な最先端医療を推進する臨床獣医師など、農畜産業のグローバル化に伴う多様な社会ニーズに対応できる実践力とリーダーシップを発揮する能力を身につけた、食の安全や動物とヒトの健康の向上に貢献できる指導的な教育者・研究者を養成します。

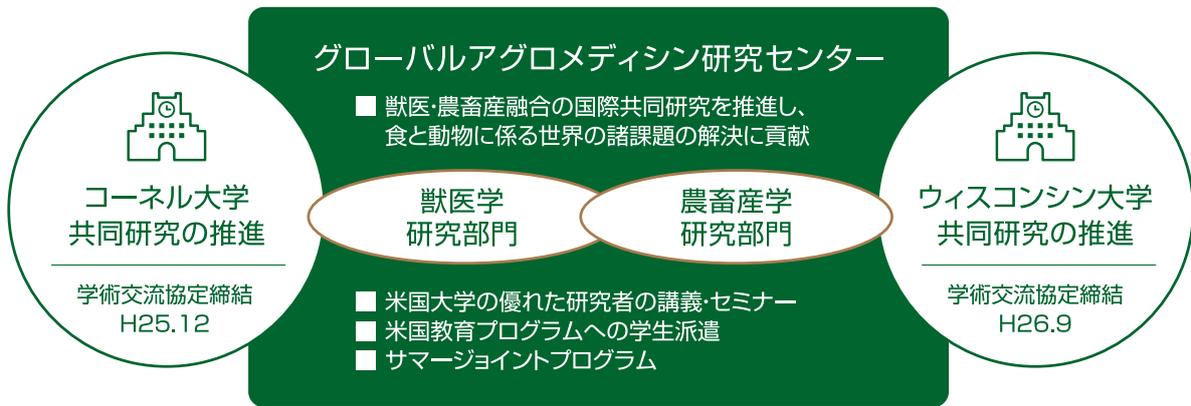
別 科(酪農専修)

現在の酪農界では、ウシを健康に飼い適切に乳生産を行うという酪農の基本技術だけでなく、多様な経営形態にも対応できる人材が必要とされています。そこで、別科では、【酪農に関わる基本的知識と技能を備え、食と農の大切さを基礎として「農場から食卓まで」の幅広い視点で酪農に適応できる知識と実践力を有し、国際的視野で地域の酪農を担い、日本の酪農産業をリードできる人材を育成する。】ことを教育目標に、実務実習を主体とした多様な酪農技術を連携させた教育プログラムを提供しています。



グローバルアグロメディシン研究センター

世界トップレベル大学等との国際共同研究及び教育交流を推進していく中核的組織として平成27年4月に設置されました。本センターの目的は、本学と海外の大学の研究者が結集して、獣医・農畜産融合の国際共同研究を推進し、食と動物に係る世界の諸課題の解決に貢献することです。センター内には、獣医学研究部門と農畜産学研究部門を配置し、多様な領域から多くの教員が国際共同研究に参画しています。両研究部門では、獣医学・農畜産学分野の世界大学ランキングトップレベルにある米国コーネル大学及びウィスコンシン大学との間で、食と動物に係る世界の諸課題の解決に向けて、多様な共同研究を展開しています。実際に、両大学の教員が本学に滞在し、また、本学教員が両大学を訪問して、国際共同研究を推進することで、若い人材の育成をサポートしています。教育面では、両大学の優れた研究者による講義・セミナーの実施や、米国で実施される教育プログラムへの学生派遣のほか、ウィスコンシン大学とは、サマージョイントプログラムと称して、両大学の学生が北海道の自然や食の生産から加工までを学ぶプログラムを実施し、国際的な視野と感覚をもって学ぶことができる教育を推進しています。



コーネル大学



ウィスコンシン大学

原虫病研究センター(共同利用・共同研究拠点)

我が国の獣医・畜産系大学で唯一の家畜原虫病に関する研究拠点として、国内外の産学官との研究連携により、人獣共通原虫病の制圧と動物生産性向上による蛋白質資源の確保に努め、世界人類の健康と福祉に学術的に貢献し得る原虫病に関する総合的研究を行います。

平成26～31年度にはAMED/JICA SATREPSプロジェクト(モンゴル)を実施し、国際的な高度専門職業人の育成に貢献しました。現在も共同利用・共同研究拠点事業、JICA草の根プロジェクトによる畜産農家支援プログラム等を実施して国内学の原虫病対策に係る先端研究と次世代を担い世界をリードする国際的な高度専門職業人の育成に取り組んでいます。

また、平成19年にスーラ(トリパノソーマ・エバンシ感染症)、ウマピロプラズマ症及びウシバベシア症の国際獣疫事務局(WOAH)リファレンスラボラトリー、平成20年に「動物原虫病の監視と制圧」に関するWOAHコラボレーティングセンター、平成28年度には試験所能力を国際的に証明するISO/IEC 17025:2005の認定を取得しました。国内外の関連機関からの診断依頼に対する確定診断の実施や国際標準診断法の提供などを行い、世界中の動物原虫病の監視・制御に貢献しています。



獣医・畜産領域で日本唯一の原虫病総合研究施設

産学連携センター

産学連携推進室、知的財産・リスク管理室、2室体制で構成されており、外部の企業等からの技術相談窓口や知的財産の管理・活用等、産業界と大学を繋ぐことで、大学の研究成果を社会へ還元する中心的な役割を果たしています。

また、令和4年度、北見工業大学、小樽商科大学との法人統合による北海道国立大学機構が発足したことに伴い設置されたオープンイノベーションセンターと連携しながら、農商工の分野融合研究を加速させています。

インキュベーションオフィスには、共同研究

等を実施している企業15社が入居しております。これらの企業とは、講義・実習担当講師としての派遣、本学学生のインターシップ受入、本学大学院への社員の社会人入学などの交流が行われ、様々な成果が生まれています。

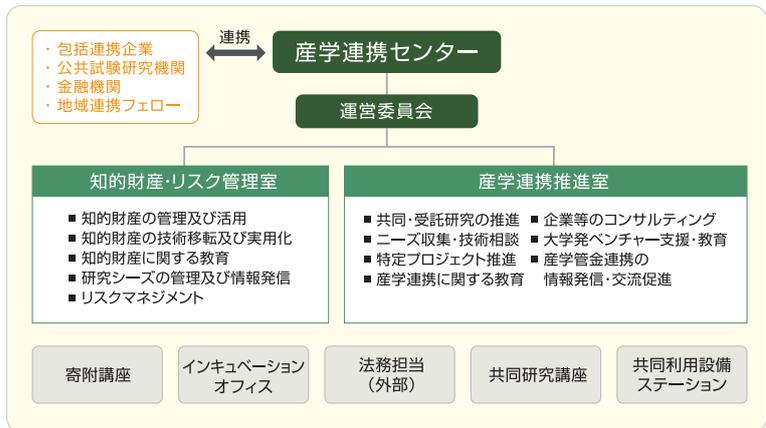
令和3年3月に設置された企業等集積プラットフォームでは、大学研究シーズ等の情報発信、地域のニーズに応じた交流会開催、コンソーシアム作りや共同研究を後押しする資金提供(地域共創ファンド)により産学官金連携の好循環を生む活動を展開しています。



企業等集積プラットフォームのホームページを設置し、情報発信



インキュベーションオフィス入居企業



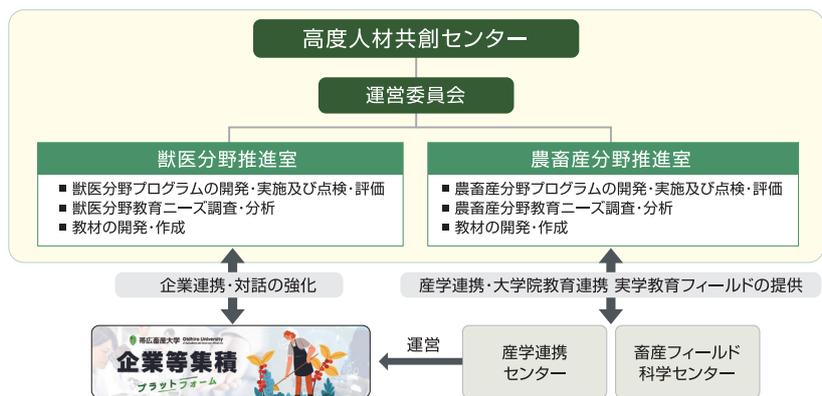
高度人材共創センター

高度人材共創センターは、農業・食品関連企業、地方公共団体等と協働して社会人教育を展開する社会共創推進組織として令和5年7月に設置されました。

本センターの目的は産業界及び地域社会と連携して獣医農畜産分野の先進的な社会人教育プログラムを開発・実施することにより、高度専門職業人の養成及び農業を基盤とする産業振興並びに地域社会の持続的発展に貢献することです。

そのため、同センターの運営委員会は、センター長、センター業務を担う学内教員に加え、関係企業・団体等の代表者、地方公共団体等の代表者で構成し、社会の要請等を的確に反映できる運営体制としています。また、同センター内に、「獣医分野推進室」及び「農畜産分野推進室」を設置し、関係する教員を重点的に配置することで、社会のニーズ等を踏まえた体系的・効果的な社会人教育プログラムを構築・実施可能な体制としています。

現在実施しているプログラムとしては、獣医分野では、「生産獣医療技術研修」「馬繁殖技術研修」等を、農畜産分野では、「酪農基礎技術研修」「フードバレーとかち人材育成事業」「野生生物保全管理技術養成事業」等があり、令和5年9月からは「農畜産プロフェッショナル経営人材育成プログラム」を新たに開始し、農業経営者の育成に取り組んでいます。

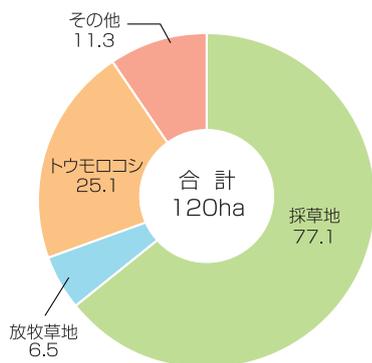


畜産フィールド科学センター

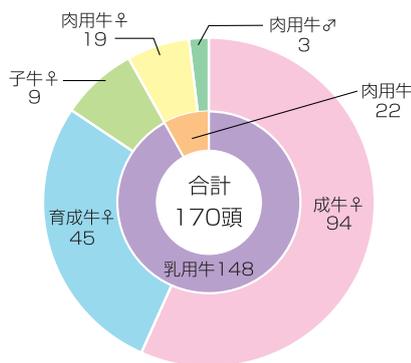
畜産フィールド科学センターは、148頭の乳牛と22頭の肉牛を飼育し、120haの耕地で粗飼料を完全自給すると共に輸入穀物に代わる濃厚飼料として実取りトウモロコシを栽培・利用する「資源循環型酪農」に取り組んでいる酪農場で、農畜産・獣医臨床に関する実習教育・試験研究及び地域社会への普及・体験教育活動を展開しています。学生教育では理論と実を統合した実践的教育を、研究活動では牛の飼養管理・疾病、飼料生産などに関する幅広い実証的応用研究者を、そして地域貢献活動として、小学生を対象とした体験学習から獣医師・家畜人工授精師を対象とした社会人の卒後教育も行っています。

平成26年度には乳製品工場がFSSC22000の認証を、令和元年度には搾乳施設と牛舎がISO22000の認証の資格を取得し、センターで生産される製品等について、食品安全マネジメントの構築と運用を行っています。

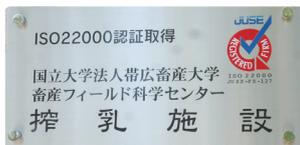
●土地面積(ha) (令和5年予定)



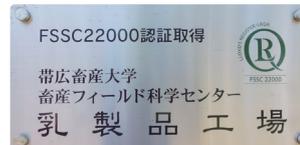
●家畜頭数(頭) (令和5年5月1日現在)



令和5年に完成した新牛舎



ISO22000認証取得搾乳施設
(うしづ。の搾乳風景)



FSSC22000認証取得工場で
製造される畜大牛乳と
畜大アイスクリーム

動物医療センター

動物医療センターでは、診療科(伴侶動物、産業動物、診断検査)を置いて、一般外来の動物診療以外にも、動物の精密検査・特殊診断・治療に取り組んでいます。同時に、『教育病院』としての学部学生・大学院生への実践的(参加型)臨床実習教育の場を提供しています。

診療活動においては、高度獣医療提供のための設備等充実がなされた診療施設であることは言うまでもありませんが、他大学と比較して産業動物(大動物)の占める割合がきわめて高いのも特徴の1つです。取扱う動物の診療頭数は下表のとおりとなっています。



伴侶動物手術



MRI装置

●診療頭数実績(頭)

(令和4年度)

区分	伴侶動物(小動物)				産業動物(大動物)				計
	犬	猫	その他	小計	馬	牛	その他	小計	
診療頭数	1,621	483	1	2,105	1,845	3,774	53	5,672	7,777

動物・食品検査診断センター

本センターは我が国初となる獣医大学の動物・食品検査診断センターであり2014年に創設されました。2017年にはISO/IEC17025の認定を取得し、正確な測定/校正結果を生み出す能力において厳しい審査基準に適合し認定を受けた試験機関です。その設置目的は“農場から食卓まで”の食の安全性を確保するために、家畜や食品の検査診断を行い動物衛生と食品衛生に寄与することで社会に貢献することです。

本センターは教育研究部門と検査部門の2つの部門から構成されています。教育研究部門はさらに細菌分野、真菌分野、ウイルス分野、毒性分野、検査開発分野の5つの分野にわかれており、各々の専門分野を生かした教育と研究を行なっています。検査部門では、畜産物の生産から流通・消費に至る過程で発生または発生が予想される種々の問題に対処し、食の安全性確保に資する検査を行っています。また、教育では高度専門職業人育成に重点を置き、学部・大学院教育に貢献すると共に、社会人向けの食品安全に係る講習会を開催し、卒後教育や社会人教育も行っています。

このように、本センターは食の安全性確保に資する検査を行うことで動物衛生と食品衛生に寄与し、また、食に係る高度専門職業人を育成し多くの優秀な人材を社会に輩出することで我が国の産業の発展に貢献しております。



動物・食品検査診断センター

大学情報分析室

大学情報分析室は、大学業務に係る各種情報の収集及び分析を行い、教育、研究、国際、社会貢献活動及び管理業務の支援や大学運営の改善・強化を推進するための業務を行っています。

農学情報基盤センター

農学情報基盤センターは、「情報処理」についての教育、研究の中心的役割を担っており学内ネットワークシステムの拠点でもあります。ウイルス対策ソフトウェアを全学に無償配布し、また、ネットワーク監視ツールを導入するなど、学内ネットワーク環境の安全かつ安定的な運用を行っています。マイクロソフトと包括ライセンス契約を結んでおり、教職員や学生が自由にオフィス製品の利用やOSのバージョンアップを行えます。スパムメール対策としてセキュアMXを導入し、教職員にとって快適なメール環境を実現しています。



コンピュータ実習

実験動物施設管理室

実験動物施設管理室は、学内の動物飼育室・動物実験室の一元管理を目的として設置した共同利用施設で、平成23年には、農学系としては初めて、国立大学法人動物実験施設協議会の会員施設として認められました。

動物実験を取り巻く環境あるいは行政の変化を適切に捉えながら、実験動物施設、そこに飼育されている動物の適正な管理・運営及び施設利用者に対する実験・研究サポートを実施しています。



実験動物舎I

獣医学教育国際認証推進室

平成25年4月、国際水準の獣医学教育課程を構築するために獣医学教育国際認証推進室が設置され、令和元年にはEAEVE(欧州獣医学教育機関協会)の認証を取得しました。

本推進室では、日々変化を続ける獣医学教育を取り巻く環境に適切に対応するため、国際的な獣医学教育評価方法・内容等について調査するとともに、それに応じた提言や教育の質保証のための自己点検・評価などの活動を行っています。

附属図書館

図書館資料を体系的に収集・整理・保存し、その利用奉仕につとめ、広く学術文化の向上に寄与することを目的としています。また、高度情報化社会、かつ、多種多様な知的要求に応ずることができるよう図書館のネットワーク化、電子図書館化など大学図書館として対応できるよう努力しています。



図書館

資料数

(令和5年3月31日現在)

●図書冊数		●雑誌種類数	
和書	169,600冊	和雑誌	4,969冊
洋書	48,651冊	洋雑誌	1,285冊
計	218,251冊	計	6,254冊
●視聴覚資料数			
DVD・BD・ビデオテープなど		2,607点	
●電子ジャーナルタイトル			
Elsevier Science Direct	Springer LINK		
Wiley Online Library	Science		
Journal of Animal Science	Nature		
BioOne	Veterinary Record		
American Chemical Society (ACS)			
Proceedings of the National Academy of Sciences of the U.S.A. (PNAS)			
ルーラル電子図書館			

利用状況

(令和4年度)

入館者	67,986人 (1日平均214人)
図書貸出冊数	12,392冊 (1日平均39冊)
レファレンスサービス	150件
文献複写依頼件数	325件
文献複写受付件数	103件
文献複写海外依頼件数	0件
帯広市図書館 市民文庫 貸出冊数	523冊

保健管理センター

保健管理センターは、学生・職員の保健管理に関する専門的業務を行う組織で、健康増進・保持と疾病予防に向けた取り組みを行っています。センターでは専任の医師と看護師等が常駐して急病者に対する処置・投薬などのプライマリケアを行い、必要時には市内の医療機関と連携して治療にあたります。また、嘱託の精神科医や、カウンセラーによるメンタル相談を定期的に行っています。

大学教育センター

入試に関することから学部・別科・大学院の教育及び企画運営、学生への修学支援、生活支援などを一括して担うための組織として大学教育センターが設置されています。

大学教育センターは「入試部」「学部教育部」「大学院教育部」の三部で構成され、さらにその下に「入試広報室」「入学者選抜方法研究室」「教育支援室」「学生相談室」「就職支援室」「学生・課外活動支援室」「留学生支援室」「特別修学支援室」が置かれており、教育担当副学長がセンター長を務めます。

イングリッシュ・リソース・センター

イングリッシュ・リソース・センターは、英語教員が中心となって運営する組織で、英語教育の積極的な推進、及び大学の管理運営における英語関連の支援に取り組んでいます。

英語教育推進のために、①リーディング教材の貸し出し、②学生・教職員が集って昼食と会話を楽しむイングリッシュ・ランチの実施、③学生が自身の海外体験を英語で発表するトラベルログの開催などを行っています。



英語教材の貸出

国際活動

帯広畜産大学は、基本目標に、知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、「食を支え、暮らしを守る」人材の育成を通じて地域及び国際社会へ貢献することを大学のミッションとして掲げ、獣医・農畜産学分野の教育研究を通じて人類の健康と国際社会の平和に貢献するため、海外大学、国際機関、国際協力機関との連携事業を推進しています。

国際協力

本学では、獣医・農畜産学分野での実学研究の成果を還元し、国際社会の持続的発展に資するため、独立行政法人国際協力機構（JICA）の草の根技術協力事業等に参画し、令和5年3月末までにJICA専門家として本学教員364名を発展途上国に派遣しています。また、JICAからの委託に基づき、開発途上国の研究者、技術者等を研修員として88カ国813名受入れています。

■専門家の派遣

パラグアイ共和国

パラグアイ酪農の持続可能な発展をめざすネットワークを活用した酪農家支援体制構築プロジェクト(実施中)

平成23年6月から継続的に行ってきたプロジェクトの発展型プロジェクトとして開始しました。これまでのプロジェクトで見えてきた課題にフォーカスし、デモンストレーション農場で蓄積されたデータを比較・分析し、酪農家への指導データとして提供しています。また酪農家を指導する農協所属の獣医師や農業技師への知識・能力向上の支援を継続して行い、酪農家支援体制の構築を目指しています。



ウガンダ共和国

マダニ媒介感染症制御による畜産農家支援(実施中)

畜産農家の多くは、マダニ吸血による直接的な被害等による家畜の健康状態悪化に直面しています。薬剤抵抗性マダニの出現などにより、殺マダニ剤によるマダニ駆除も十分な効果が得られず、薬代出費等の課題も生じています。

本プロジェクトは、薬剤抵抗性マダニの特定、有効な薬剤の提示及び畜産農家や獣医師に対するマダニ対策プログラム実施を通して、マダニによる家畜への被害を減少させ、畜産農家の生産性向上を目指しています。



■研修員の受入れ

バリューチェーンの整備を通じた農村振興

生産現場と消費者を結ぶバリューチェーン、特に高度な知識や技術、組織化が必要とされるミルクチェーン構築を縦軸に、耕畜連携や資源の有効利用、農村と都会の交流を通じた食の安心・安全や農業への理解を深める取組の紹介を横軸に、包括的な農村計画を立案、構築できる能力涵養を目指しています。

人獣共通感染症対策(原虫病含む)研究者育成

動物からヒトに伝染する人獣共通感染症対策のための効果的な診断、治療、予防方法などについて、講義や実習を通じ習得する他、大学教員の指導を受けながら研究の基本を習得するために実践的な研修を行い、自国の問題を提議できるような基礎知識を身に付けることを目指して実施しています。

国際協力人材の育成

本学では、農場から食卓までの幅広い領域を学際的視点で捉える能力、あらゆる現場に適応できる知識・実践力、地球規模課題解決等の国際的視野を備えたグローバル人材を育成するため、学内における獣医・農畜産融合の実践的教育プログラムのほか、独立行政法人国際協力機構（JICA）との連携による国際協力経験機会や海外協定締結大学への留学などの海外派遣プログラムを提供しています。

■学生の海外派遣機会の提供

青年海外協力隊による学生海外派遣

本学ではこれまで、在学生・卒業生合わせて、300名以上のJICA青年海外協力隊員を輩出しています。現在、本学では約10年にわたり南米パラグアイ共和国において酪農技術向上の支援を行っています。活動期間が2年の長期、1ヶ月間の短期を組み合わせたボランティアグループ派遣事業を行い、同事業への参加者は、令和2年3月末までに70名（長期隊員18名、短期隊員52名）の学生・卒業生を派遣しました。隊員は、乳質の改善や飼料改善など様々な活動に従事し、活動は、パラグアイ側、日本側双方から高い評価を得ています。なお、在学生は「海外フィールドワーク」の単位を取得できます。



国際共同研究推進のための大学院生派遣プログラム

獣医・農畜産分野の世界レベルの研究実績による国際研究を強化するため、グローバルアグロメディシン研究センターを設置しています。現在は、米国コーネル大学、ウィスコンシン大学と、獣医・農畜産分野の国際共同研究、招聘外国人教員による特色ある教育プログラムの導入を推進しています。その一環として、コーネル大学、ウィスコンシン大学に大学院生を派遣し、本学との間で行われている国際共同研究に参画することにより、世界トップレベルの大学における研究活動の機会を提供するものです。



海外協定締結大学への留学

学生交流協定を締結している外国の大学に学生を派遣する短期留学制度を実施しています。対象学生は、留学時において学部3年次以上（獣医学課程は5年次以上）又は大学院生で、派遣期間は3ヶ月以上1年以内です。

留学先大学において取得した単位は、本学の大学教育センターで審査の上、卒業又は修了要件単位として認定されます。また、留学先大学における授業料は免除されます。

■海外の学生との交流

サマージョイントプログラム

本学では、ウィスコンシン大学の学生と共に学ぶ「サマージョイントプログラム」を開講しています。このプログラムは、両大学の学生が相互にコミュニケーションを図りながら、北海道の自然、食の生産から加工までについて学びを深めます。短期間ではありますが、異文化適応能力や英語によるコミュニケーション能力の育成を図る内容であり、将来的にグローバルに活躍をしたいと考える学生にとっては、非常に有意義なプログラムとなっています。



■入試制度

国際協力特別選抜制度（平成18年～）

大学院畜産学研究科において、青年海外協力隊等の海外ボランティア活動や国際協力実務経験者を対象とした学生募集を行っています。本制度により入学した学生には、授業料相当額（月額5万円）の奨学金を貸与し、課程修了後に国際協力関係の業務に従事した場合には、貸与した奨学金の返還を免除することとしています。

社会貢献

地域研究機関による連携協力決議

事項名	スクラム十勝
目的・概要	十勝圏に存立する公設6研究機関が我が国の動植物性食品生産の中核である十勝地域が抱える食の安全と安心(生産と衛生)に関する多様な課題を解決並びに課題解決に資する高度な人材を育成し、十勝地域及び我が国並びに世界における食の安全及び安心の確立ひいては健全な食文化の構築に資するため、各研究機関等間における包括的な連携協力を推進するための枠組みを確立することを目的とする。
構成機関	国立大学法人北海道国立大学機構帯広畜産大学 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター芽室研究拠点 地方独立行政法人北海道立総合研究機構畜産試験場 地方独立行政法人北海道立総合研究機構十勝農業試験場 公益財団法人とかち財団 独立行政法人家畜改良センター十勝牧場
決議年月日	2005.3.17

高大連携事業

平成17年3月に北海道帯広農業高等学校と、平成22年3月に北海道更別農業高等学校との連携に関する協定を締結しました。

大学と高校との垣根を越えた連携で、教員の相互派遣や生徒及び学生の実習受入のみならず、昨今重要視されているHACCPに関する学習支援や、サークル活動を通じた生徒と学生の交流など、様々な高大連携事業を展開しています。

帯広市との連携事業

平成17年6月に締結した包括連携協定に基づき、社会人の人材育成事業や学生と地域のつながりを強化する事業など、様々な地域貢献事業を積極的に展開しています。

帯広市とのフードバレーとかち人材育成事業

本事業では、地域の農業・食品関連産業の更なる事業展開を支える人材の育成、企業の発展に寄与する人材の育成を支援しています。令和5年度は、マネジメントコース、食品安全管理コース、農業生産者コース、農業経営者コースの4つのコースを設け実施します。更に修了生を対象に、アグリビジネスの事業化や課題解決を支援する個別のフォローアップ制度を設け、企業ニーズに対応した人材のスキルアップを行っています。



農業経営者セミナー実施の様子

おびひろ動物園との連携協定

相互に協力して動物に関する教育・研究の充実を目指すと共に、魅力ある動物園としての活性化を図ることを目的として、平成22年7月におびひろ動物園との連携協定を締結しました。これまで、インターンシップやヒツジの毛刈り作業の公開などの共同イベントのほか、学生参加による魅力的な動物園づくり事業の実施、また、おびひろ動物園内に「帯広畜産大学サテライトブース」を開設し骨格標本の展示を行うなどの連携事業を展開しています。



おびひろ動物園に設置されている「帯広畜産大学サテライトブース」

包括連携協定

一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団

文化やスポーツを通じた社会貢献や振興に寄与することを目的として、本学の学生サークルが主体となり、スポーツ体験などを通じた市民との交流を行う「みんなのちくだい。」事業を一般財団法人帯広スポーツ振興財団と連携して実施しています。



「世界へ羽ばたけ!カーリング体験」

株式会社十勝毎日新聞社

大学と報道機関、それぞれの機能と強みを生かし、相互に充実した連携を行いながら、十勝地域における様々な課題や、特に基幹産業である農業の振興に関する研究・報道等を通じて社会に成果を還元し、地域の活性化への貢献をすると共に、住民の生活向上や学生の成長・発展に寄与することを目的として平成28年8月10日に株式会社十勝毎日新聞社と包括連携協定を締結しました。この協定に基づき、イベントの共催、講師派遣などを行っています。

上川大雪酒造株式会社および十勝緑丘株式会社

「発酵・醸造」に係る現場レベルの実践的な教育研究の活性化を目的に、令和元年7月に連携協定を締結し、構内に上川大雪酒造株式会社の酒蔵「碧雲蔵」を設置しました。令和2年度より、上川大雪酒造株式会社の総杜氏による講義や酒蔵見学・実習の受け入れ、共同研究などを連携して行っています。

また、酒造りを通じた実践的な教育のため、学生が職人の指導のもと清酒製造に参加するインターンシップとして「学生の酒造りプロジェクト」を実施しています。製造された純米吟醸「碧雲」は、帯広畜産大学生協同組合で限定販売されています。



酒蔵「碧雲蔵」

東日本電信電話株式会社(NTT東日本)

持続可能なスマート農畜産業に関する教育研究の推進などを目的に令和2年10月にNTT東日本と連携協定を締結しました。

本学の農畜産実証フィールドにICTを導入し、「Farm to Table」におけるデータ収集・統合・分析を行う共同研究やICT人材育成、研究成果の社会実装に向けた企業間連携に取り組んでいます。

帯広商工会議所

十勝の地域産業が抱える課題解決および地域活性化に取り組むため、令和2年9月に帯広商工会議所と連携・協力に関する協定を締結しました。

本連携では、家畜糞尿による環境問題の解決に向け、バイオガスプラントから副産物として発生する余剰消化液の資源利用や無害化等についての研究を行う寄附講座を設置しました。

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)

北海道十勝におけるSociety 5.0の早期実現を図ることを目的に、平成31年4月に農研機構と連携・協力に関する協定を締結しました。

「北海道十勝発スマートフードチェーン・プロジェクト」において、育種・生産から加工・消費にわたるフードチェーンをAIとデータ連携によるスマート化によって食品の高付加価値化を図り、北海道十勝の農業・食品産業競争力の強化を目指す共同研究等を行っています。

よつ葉乳業株式会社

平成21年に包括連携協定を締結し、酪農や乳製品に関する共同研究および次世代の酪農家の育成を目的とする「帯広畜産大学デイリースクール」を開催しています。

カルビー株式会社

平成24年10月に締結した包括連携協定により、パレイショ栽培における施肥・土壌改良技術に関する共同研究を実施し、毎年3月にこの共同研究成果の発表会を行っています。

敷島製パン株式会社

平成24年4月に包括連携協定を締結し、共同研究や社会人大学院生の受け入れを継続して行っています。農産加工実験棟内の製パン実験施設「とかち夢パン工房」は様々な教育研究に活用され、共同研究の成果が製品に活用されています。

寄附講座

「資源循環環境学講座」

十勝地域の生産者、企業、金融機関8社と電力会社の寄附を受け令和3年10月に開設されました。大規模農畜産業におけるSDGs達成の基盤として、環境負荷低減による循環型農畜産業実現に向けた研究を実施するとともに、新たな農畜産業システムの構築と運用に貢献する人材を育成します。

「バレイショ遺伝資源開発学講座」

将来にわたって安全・安心なバレイショを供給するため、生産者や加工メーカーが資金を出し合って平成25年4月に開設されました。バレイショの原産地であるアンデス地方では、疫病、ウイルス、センチュウなどの病害虫に強い在来品種が作られ、畑の周辺には野生バレイショが広がっています。これらの持つ優れた遺伝的特性をバレイショ品種に導入するために必要な技術開発と素材系統の育成を行っています。

「生命平衡科学講座(白寿)」

本講座は、医療機器メーカーである株式会社白寿生科学研究所と平成24年11月より、生命に元来備わる体内環境を適正範囲に保つ調節システム(恒常性)の総合的研究を目的に設置されました。現在は、独自に工夫されたストレスモデルや筋疲労モデル(マウス)を活用し、電界の安全性と医療応用性を念頭に自律神経系や内分泌系への作用の解明が進んでいます。また、当講座が開発に参画した電界可視化技術が日本及び中国、台湾で特許されるなど、成果の社会実装が着実に進んでいます。

共同研究講座

企業から受け入れた資金により、大学内に講座を設置し、教員と企業が対等な立場で共通の課題を共同して研究を行うものです。

大学内に研究組織として開設し、企業から研究者を受け入れることにより、研究の効率化や優れた研究成果の創出を図ることができます。

「Pasco 未来パン共同研究講座」

北海道発のパンの開発および国産小麦の認知拡大、食料自給率向上へ貢献することを目的に、令和元年度に敷島製パン株式会社により設置されました。

国産小麦の食味などの加工適性に関わる要因の分析や、国産小麦由来の乳酸菌を用いた発酵種を利用したパンの品質改善・保存性向上に関する研究を行っています。

令和4年度社会貢献事業

事業名	内容	件数
学校教育等の支援	高大連携事業、出前授業など	81
社会人学習の支援	フードバレーとかち人材育成事業、生産獣医療技術研修、野生生物保全管理技術養成事業など	109
生涯学習の支援	障がい者乗馬体験事業、市民開放授業、市民大学講座など	55
まちづくりへの貢献	ちくだいらんぷプロジェクト、おびひろ動物園連携事業など	10
行政機関の委員等への就任	国、地方公共団体、その他団体の委員など	216
国際貢献	JICA連携事業など	21



障がい者乗馬体験事業



野生生物保全管理講習

職員数

(令和5年5月1日現在)

区 分	学長	教授			准教授			講師			助教			教員計			事務・技術職員			合計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
役員	1																			1	0	1
研究域		36	3	39	30	7	37	1	1	2	6	4	10	73	15	88			0	73	15	88
グローバルアグロメディシン研究センター		6		6	9	2	11			0	6		6	21	2	23			0	21	2	23
原虫病研究センター		7		7	2	1	3			0			0	9	1	10	1		1	10	1	11
産学連携センター				0	1		1			0			0	1	0	1	1		1	2	0	2
畜産フィールド科学センター				0	2	1	3			0			0	2	1	3	6	3	9	8	4	12
動物医療センター				0	1		1			0			0	1	0	1			0	1	0	1
動物・食品検査診断センター				0	1		1			0			0	1	0	1			0	1	0	1
農学情報基盤センター				0	2		2			0			0	2	0	2	1		1	3	0	3
保健管理センター				0			0			0			0	0	0	0	1	1	2	1	1	2
事務部				0			0			0			0	0	0	0	40	27	67	40	27	67
合計	1	49	3	52	48	11	59	1	1	2	12	4	16	110	19	129	50	31	81	161	50	211

学生の定員・現員

●畜産学部

(令和5年5月1日現在)

課 程	入学定員		収容定員		現 員								
					1年次		2年次		3年次		4年次		5年次
共同獣医学課程	40		240		男	14	15	12	17	14	20	92	
					女	27	27	31	24	23	19	151	
					計	41	42	43	41	37	39	243	
畜産科学課程	210	10 ^注	840	20 ^注	男	85	87	88(1)	98	-	-	358(1)	
					女	132	135	127(1)	144(1)	-	-	538(2)	
					計	217	222	215(2)	242(1)	-	-	896(3)	
合 計	260		1,100		男	99	102	100(1)	115	14	20	450(1)	
					女	159	162	158(1)	168(1)	23	19	689(2)	
					計	258	264	258(2)	283(1)	37	39	1,139(3)	

注:第3年次編入学を示す ※()内は内数で外国人留学生を示す

●畜産学研究科

(令和5年5月1日現在)

課 程	専 攻	入学定員	収容定員	現 員															
				1年次			2年次			3年次			4年次			計			
				男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
博士課程	畜産科学専攻	前期課程	48	96	34(7)	37(4)	71(11)	25(3)	34(6)	59(9)	-	-	-	-	-	-	59(10)	71(10)	130(20)
		後期課程	10	30	11(6)	8(4)	19(10)	5(3)	3(1)	8(4)	9(4)	6(3)	15(7)	-	-	-	25(13)	17(8)	42(21)
	獣医学専攻	5	20	5(3)	6(3)	11(6)	4(3)	4(2)	8(5)	0	5(5)	5(5)	5(5)	5(5)	10(10)	14(11)	20(15)	34(26)	
合 計		63	146	50(16)	51(11)	101(27)	34(9)	41(9)	75(18)	9(4)	11(8)	20(12)	5(5)	5(5)	10(10)	98(44)	108(33)	206(67)	

※()内は内数で外国人留学生を示す

●別 科

(令和5年5月1日現在)

専 修	入学 定員	収容 定員	現 員								
			1年次			2年次			計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計
酪 農 専 修	15	30	9	3	12	8	4	12	17	7	24

外国人留学生

(令和5年5月1日現在)

区 分 国 名	博士・博士後期			博士前期			学部			研究生			特別聴講学生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
イラン	1	1	2			0			0			0			0	1	1	2
インドネシア			0		1	1			0			0			0	0	1	1
エジプト	1	2	3			0			0			0			0	1	2	3
ガーナ	1		1			0			0			0			0	1	0	1
キューバ		1	1			0			0			0			0	0	1	1
ケニア	2	1	3		3	3			0			0			0	2	4	6
ザンビア		1	1			0			0			0			0	0	1	1
ジンバブエ	1		1			0			0			0			0	1	0	1
スリランカ	3	2	5			0			0			0			0	3	2	5
タイ	1	3	4			0			0			0			0	1	3	4
パキスタン	1	1	2			0			0			0			0	1	1	2
パラグアイ		1	1	1	1	2			0			0			0	1	2	3
バングラデシュ	1	2	3			0			0			0			0	1	2	3
ブラジル	1		1			0			0			0			0	1	0	1
ベトナム	2	1	3	1		1			0			0			0	3	1	4
マラウイ	1	1	2	1		1			0			0			0	2	1	3
ミャンマー		1	1	1	2	3			0			0			0	1	3	4
モザンビーク	1		1	1	1	2			0			0			0	2	1	3
モロッコ		1	1			0			0			0			0	0	1	1
モンゴル	1		1			0			0			0			0	1	0	1
ラオス		1	1	1		1			0			0			0	1	1	2
ルワンダ	1		1	1		1			0			0			0	2	0	2
南アフリカ			0		1	1			0			0			0	0	1	1
大韓民国	1		1	1		1		1	1			0			0	2	1	3
中華人民共和国	4	3	7	2	1	3	1	1	2	2	1	3			0	9	6	15
合 計	24	23	47	10	10	20	1	2	3	2	1	3	0	0	0	37	36	73

●国費・私費別一覧

(令和5年5月1日現在)

区 分 費 目	博士・博士後期			博士前期			学部			研究生			特別聴講学生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
国 費	7	7	14	1	1	2			0	1		1			0	9	8	17
私 費	17	16	33	9	9	18	1	2	3	1	1	2			0	28	28	56
合 計	24	23	47	10	10	20	1	2	3	2	1	3	0	0	0	37	36	73

国際交流協定締結大学

締結大学	締結年月
アルバータ大学(カナダ)	1985. 8
アスンシオン大学(パラグアイ)	1986. 4
フィリピン大学ロスバニオス校(フィリピン)	1991. 9
忠南大学校獣医科大学(大韓民国)	1993. 1
ミュンヘン大学(ドイツ)	1994. 7
ソウル大学校 農業生命科学大学及び獣医科大学(大韓民国)	1996.10
ペラデニヤ大学農学部(スリランカ)	1996.11
建国大学校(大韓民国)	1996.12
江原大学校(大韓民国)	1997. 8
新疆農業大学(中華人民共和国)	1999. 7
モンゴル国立農業大学(モンゴル科学生命大学)(モンゴル)	2003.10
フエ大学(ベトナム)	2005. 1
ベツスイス連合獣医学部(ベルン大学獣医学部)(スイス)	2005. 6
マヒドン大学(タイ)	2005. 7
ハノーバー獣医科大学(ドイツ)	2007.10
ボゴール農業大学(インドネシア)	2009.12
中国黒龍江省農業科学院(中華人民共和国)	2010. 8
国立屏東科技大学(台湾)	2010. 8
チェンマイ大学(タイ)	2012.12
コーネル大学(アメリカ合衆国)	2013.12
ウイスコンシン大学(アメリカ合衆国)	2014. 9
ヴァルミア・マズーリヤ大学(ポーランド)	2017. 9
ポーランド科学アカデミー(ポーランド)	2017.10
リエージュ大学(ベルギー)	2018.12
チュラロンコン大学(タイ)	2019. 2
ヴロツワフ環境生命科学大学(ポーランド)	2022. 3

●原虫病研究センターとの部局間学術交流協定

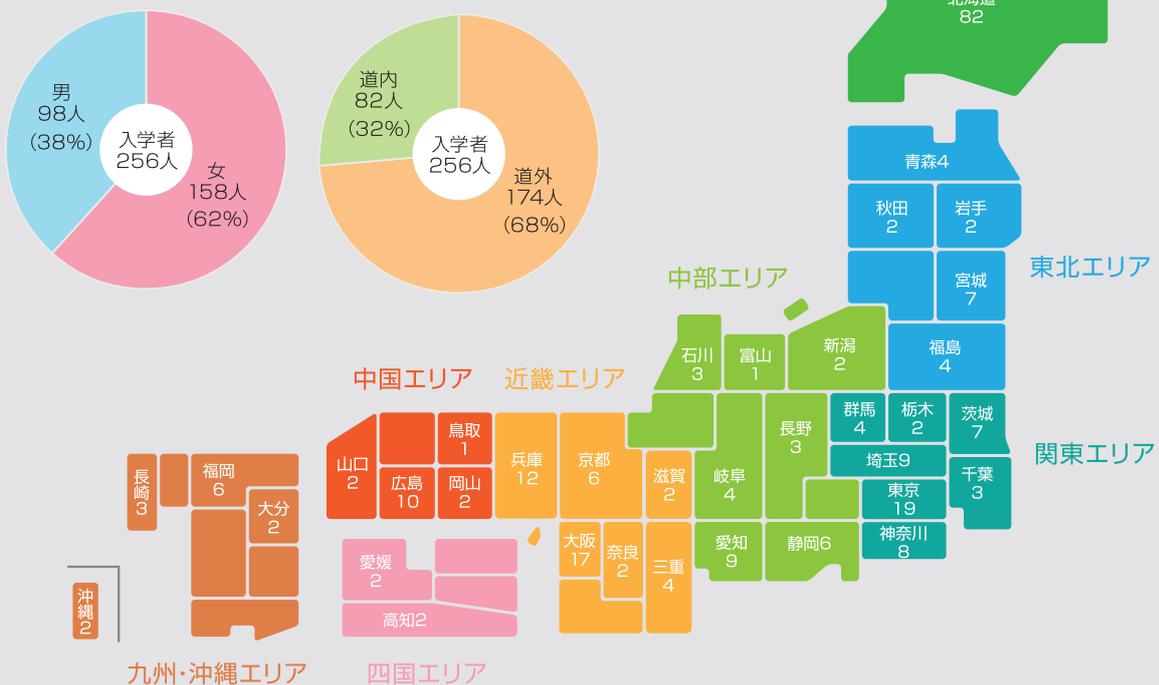
締結大学	締結年月
フィリピン大学マニラ校公衆衛生学部(フィリピン)	2008.11
中国農業科学院上海獣医学研究所(中華人民共和国)	2010. 9
マケレレ大学(ウガンダ)	2015.12
ワガドゥーグー大学(ブルキナファソ)	2016. 6
ノースウェスト大学(南アフリカ)	2017. 6
モンゴル獣医学研究所(モンゴル)	2019. 6
フィリピンカラバオセンター(フィリピン)	2019. 7
スリランカ動物生産健康局(スリランカ)	2019. 7
カビテ州立大学(フィリピン)	2019.10
新疆農業大学獣医学部(中華人民共和国)	2021.10
ダバオデルスル州立大学(フィリピン)	2022. 6
ケレタロ自治大学自然科学学部(メキシコ)	2022. 8
キルギス共和国獣医科学研究所(キルギス)	2023. 7

入学者数

●令和5年度入学志願者及び入学者数

課程名	課程等	募集人員	志願者数			志願倍率	入学者数		
			男	女	計		男	女	計
共同獣医学課程	前期日程	30	52	91	143	4.8	12	18	30
	後期日程	10	40	81	121	12.1	1	9	10
小計		40	92	172	264	6.6	13	27	40
畜産科学課程	前期日程	130	121	157	278	2.1	60	76	136
	後期日程	25	90	128	218	8.7	10	11	21
	学校推薦型選抜(A推薦)	15	12	22	34	2.3	3	12	15
	学校推薦型選抜(B推薦)	40	27	53	80	2.0	12	32	44
	社会人	若干人	0	0	0	-	0	0	0
	帰国生	若干人	0	2	2	-	0	0	0
	私費外国人留学生	若干人	1	1	2	-	0	0	0
小計		210	251	363	614	2.9	85	131	216
合計		250	343	535	878	3.5	98	158	256
第3年次編入学(畜産科学課程)		10	6	4	10	1.0	5	2	7
別科 (酪農専修)	学校推薦型選抜	10	7	3	10	1.0	7	3	10
	一般選抜	5	3	0	3	0.6	2	0	2
合計		15	10	3	13	0.9	9	3	12
大学院畜産科学専攻博士前期課程		48	34	46	80	1.7	31	34	65
大学院畜産科学専攻博士後期課程		10	10	7	17	1.7	9	7	16
大学院獣医学専攻博士課程		5	2	6	8	1.6	2	4	6

●令和5年度都道府県別学部入学者数



卒業生及び修了者数

(令和5年5月1日現在)

学科・課程等	昭和18年～ 25年度	昭和26年～ 令和3年度	令和4年度	計
獣医科	104	—	—	104
獣医畜産科	492	—	—	492
専修科	3	—	—	3
酪農科	115	—	—	115
農芸化学科	140	—	—	140
農学科	56	—	—	56
小計	910	—	—	910
獣医学科		2,273	—	2,273
獣医学課程		162	1	163
共同獣医学課程		178	45	223
家畜生産科学科		660	—	660
酪農学科		1,122	—	1,122
総合農学科		323	—	323
草地学科		701	—	701
農産化学科		801	—	801
農業工学科		667	—	667
畜産経営学科		319	—	319
畜産環境学科		711	—	711
畜産管理学科		828	—	828
畜産環境科学科		1,106	—	1,106
生物資源化学科		352	—	352
生物資源科学科		246	—	246
畜産科学科		1,236	—	1,236
畜産科学課程		2,290	220	2,510
小計		13,975	266	14,241
畜産学専攻科		48	—	48
大学院(修士・博士前期課程)		2,272	54	2,326
大学院(博士後期課程)		115	7	122
大学院(博士課程)		1	8	9
別科(草地畜産専修)		1,266	—	1,266
別科(酪農専修)		8	9	17
合計		17,685	344	18,029

※昭和18年～昭和25年度は帯広高等獣医学校、帯広獣医畜産専門学校及び帯広農業専門学校

進路状況

●卒業生の進路状況(学部)

(過去3年)

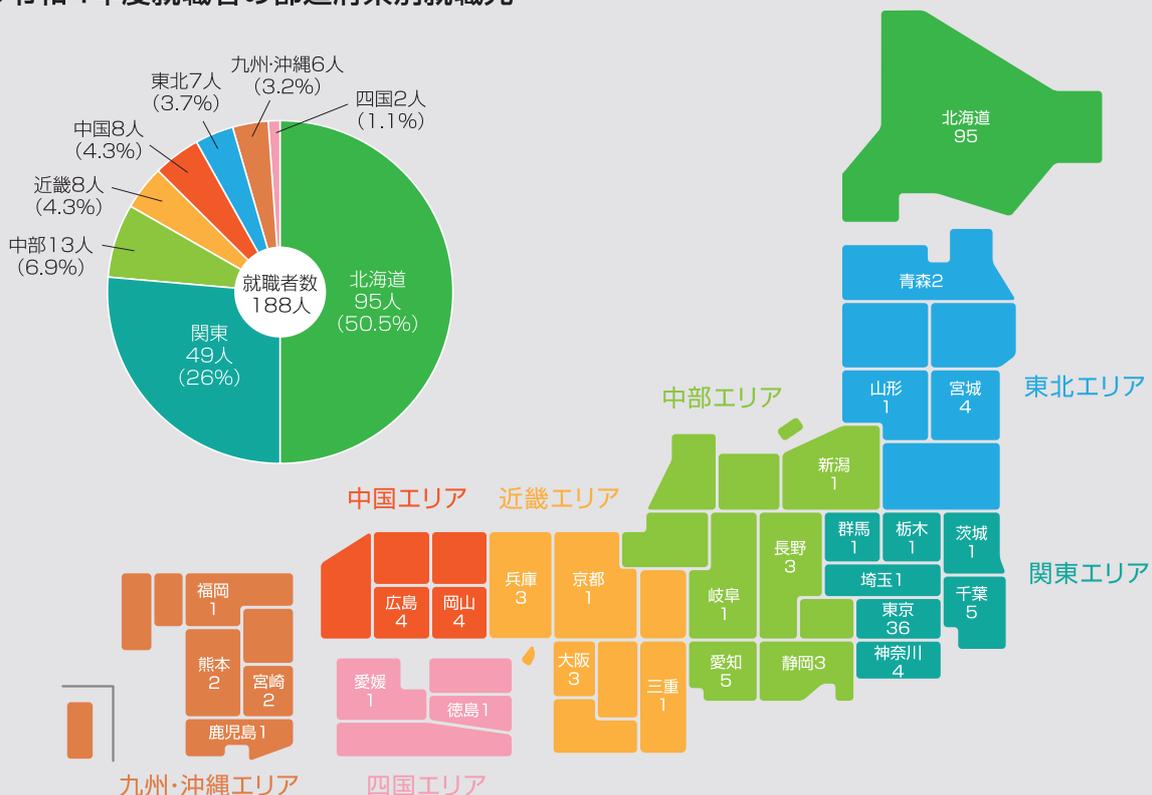
卒業年度		令和2年度	令和3年度	令和4年度
卒業生数		255	261	266
進路等	就職者	178	188	188
	進学者	60	56	64
	自営者	2	9	5
	その他	15	8	9

●就職者の産業別分類

(過去3年)

産業別		卒業年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
農 業			25	19	11
建 設 業			2	4	8
製 造 業	食料品・飼料等		34	30	28
	化 学 工 業		2	1	1
	機 械 等		1	1	1
	出 版 ・ 印 刷		1	0	0
	そ の 他		2	2	2
運 輸 ・ 通 信 業			3	1	2
卸 ・ 小 売 業			14	8	19
金 融 ・ 保 険 業			7	7	11
サ ー ビ ス 業	学術研究・専門技術		22	27	23
	医 療 保 健 業		3	4	2
	教 育		3	3	4
	そ の 他		16	11	16
公 務 員			24	35	27
情 報 産 業			5	9	5
農 業 団 体			13	21	19
上 記 以 外			1	5	9
合 計			178	188	188

●令和4年度就職者の都道府県別就職先



学生寮

(令和5年5月1日現在)

名称	収容対象	収容定員(個室)			入居現員			建物延面積(m ²)
		男	女	計	男	女	計	
学生寄宿舍	学部・大学院修士・別科	144	158	302	132	149	281	5,366

国際交流会館

国際交流会館 I	タイプ	タイプ別基準面積 建物延面積(m ²)	部屋数
	A	12.4	8
B	28.0	13	
C	41.3	8	

国際交流会館 II	タイプ	タイプ別基準面積 建物延面積(m ²)	部屋数
	A	9.7	2
B	14.5	6	
C	17.7	2	
D	19.7	3	
E	23.7	2	

福利厚生施設

施設名	面積(m ²)	備考
学生食堂	667	333席
購買部	589	書籍、文房具、日用雑貨、旅行事業等
かしわプラザ	1,346	マルチルーム、コミュニケーションホール等
逍遥舎	130	ホール、屋外デッキ等

日本学生支援機構奨学生

(令和4年度実績)

種別	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	計
大学給付奨学生	25	32	26	26	3	4	116
大学第一種奨学生	38	38	30	44	10	5	165
大学第二種奨学生	33	32	41	37	1	4	148
大学院第一種奨学生	11	7	0	-	-	-	18
大学院第二種奨学生	2	0	0	-	-	-	2

その他の奨学金

(令和4年度実績)

財団等	日本学生支援機構以外の奨学金	受給者数
	イカリ謝恩育英財団、日清食品・安藤百福Scholarship、あしなが大学奨学金、JEES・MUFG緊急支援奨学金、JEES・JRA獣医学学生奨学金、和歌山県大学生等進学支援金、長崎県獣医師確保修学支援資金 他	12
財団等	外国人留学生に対する奨学金	受給者数
	独立行政法人国際協力機構研修員受入事業、公益財団法人ロータリー米山奨学会奨学会、公益財団法人SGH財団奨学金、公益財団法人平和中島財団、公益財団法人日本台湾交流協会、日本学術振興会、文部科学省外国人留学生学習奨励費 他	59

帯広畜産大学独自の奨学金

(令和4年度実績)

日本人	外国人	受給者数
帯広畜産大学基金奨学金		19
帯広畜産大学大学院畜産学研究所日本人学生特別奨学金		6
帯広畜産大学大学院畜産学研究所博士課程及び博士後期課程特別支援制度(学内進学成績優秀者対象)		5
帯広畜産大学大学院畜産学研究所博士課程及び博士後期課程特別支援制度(学内進学成績優秀者対象)		2
帯広畜産大学大学院畜産学研究所博士課程及び博士後期課程特別支援制度(渡日前入試受験者対象)		6

令和5年度収入・支出予算（収支区分別）

●収入

(単位:百万円)

収入区分	予算額
運営費交付金	2,923
自己収入	1,073
施設費収入	408
受託研究等収入 及び寄附金収入	375
間接経費収入	56
合計	4,836

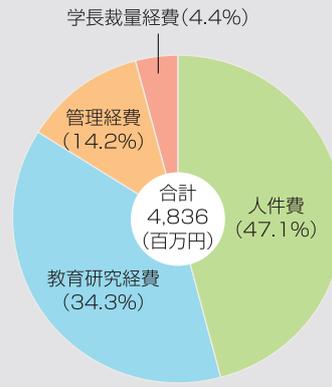
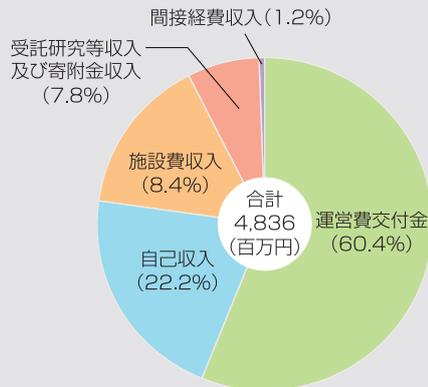
●支出

(単位:百万円)

支出区分	予算額
人件費	2,279
教育研究経費	1,659
管理経費 ^注	684
学長裁量経費	210
合計	4,836

注:本部分は管理経費に計上

※端数処理の関係上、合計と一致しないことがある



科学研究費補助金等

研究種目	年度	令和2年度		令和3年度		令和4年度	
		採択件数	交付額(千円)	採択件数	交付額(千円)	採択件数	交付額(千円)
新学術領域		0	0	0	0	0	0
基盤研究	A	0	0	0	0	0	0
	B	11	58,110	9	42,640	13	67,340
	C	37	44,070	40	56,940	43	57,980
挑戦的研究	開拓	0	0	0	0	0	0
	萌芽	3	7,150	2	3,900	2	5,850
若手研究		14	20,670	12	16,250	9	12,480
国際共同 研究強化	A	0	0	0	0	0	0
	B	6	28,340	7	29,250	6	28,990
特別研究員奨励費 ^注		8	8,480	5	5,060	9	8,560
合計		79	166,820	75	154,040	82	181,200

注:特別研究員奨励費のみ、間接経費を含まない。(PD、RPDは間接経費あり)

外部資金受入額

(過去3年)

種別	年度	令和2年度		令和3年度		令和4年度	
		件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
受託研究費		32	56,424	29	51,096	32	94,766
民間等との共同研究		175	138,247	189	117,753	170	113,076
奨学寄附金		79	93,591	80	176,348	75	79,989
合計		286	288,262	298	345,197	277	287,831

※継続契約・0円契約も全て含む

配置図・校地及び建物

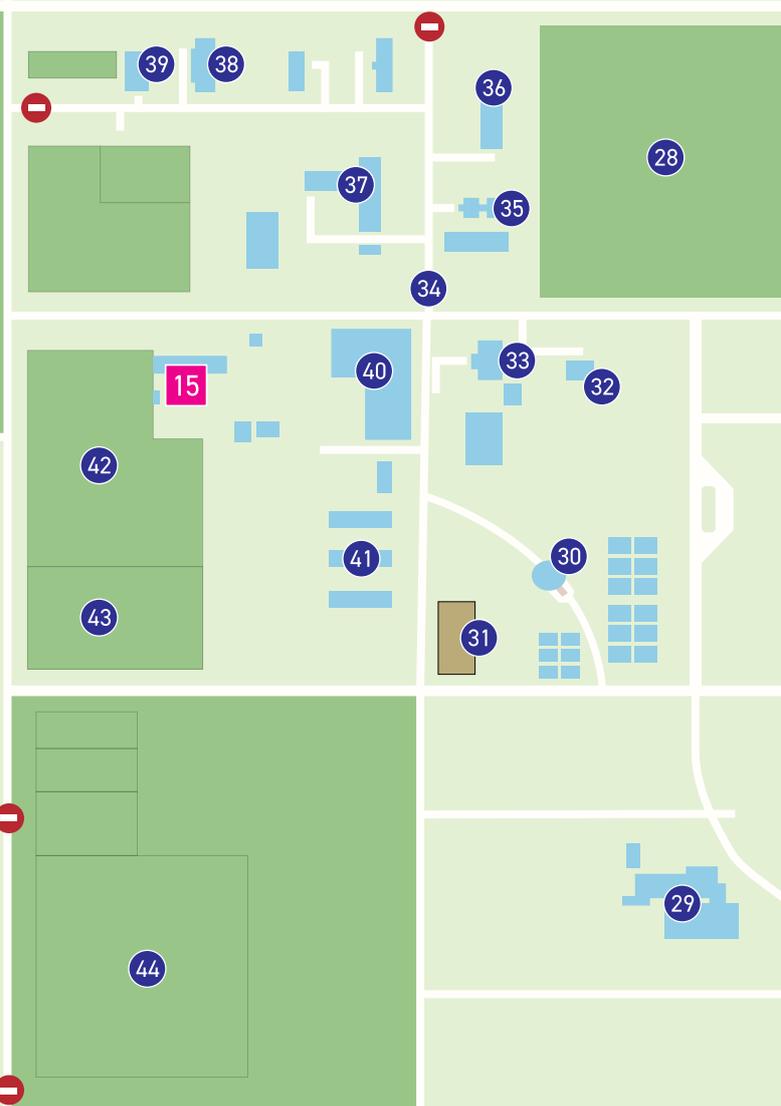


凡例

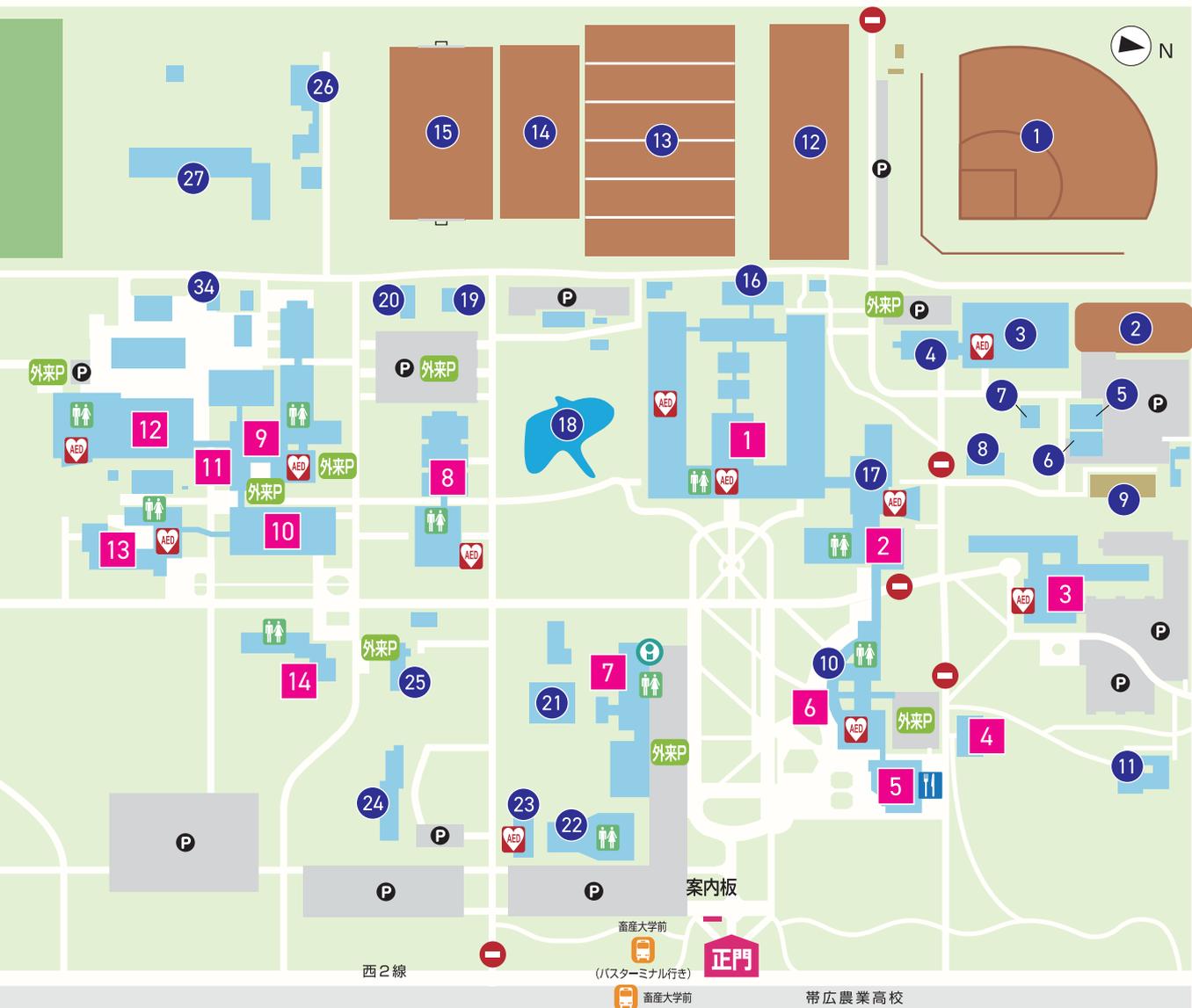
- インフォメーション
- 食堂
- 通行止めゲート
- 多目的トイレ
- 外来P 外来駐車場
- AED
- バス停

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 総合研究棟I号館 | 9 動物医療センター |
| 2 附属図書館 | 10 総合研究棟IV号館 |
| 3 学生寄宿舍 | 11 動物・食品検査診断センター |
| 4 創立70周年記念会館「逍遙舎」 | 12 産業動物臨床棟 |
| 5 福利施設(大学生協) | 13 原虫病研究センター |
| 6 かしわプラザ | 14 産学連携センター |
| 7 本部棟 | 15 厩舎 |
| 8 総合研究棟II・III号館 | 16 畜産フィールド科学センター |

- | | |
|---------------------------------|----------------|
| 1 野球場 | 23 保健管理センター |
| 2 アイスホッケー場 | 24 国際交流会館I |
| 3 体育館 | 25 農産加工実験棟 |
| 4 武道場 | 26 土木工学実験室 |
| 5 合宿棟 | 27 農業機械実験実習棟 |
| 6 宿泊研修棟 | 28 実験圃場 |
| 7 音楽練習室 | 29 碧雲蔵(上川大雪酒造) |
| 8 サークル棟 | 30 農機具庫 |
| 9 弓道場 | 31 松尾記念温室棟 |
| 10 カフェ「Farm Designs」
帯広畜産大学店 | 32 農畜産プラント |
| 11 国際交流会館II | 33 農畜産資源循環研究棟 |
| 12 テニスコート | 34 全天候型車両消毒ゲート |
| 13 ラグビー場 | 35 実習用豚舎 |
| 14 アメフト場 | 36 豚飼養試験棟 |
| 15 サッカー場 | 37 肥育用牛舎 |
| 16 農学情報基盤センター | 38 代謝試験棟 |
| 17 講義棟 | 39 羊飼養試験棟 |
| 18 柏陵池(ビオトープ) | 40 食品加工実習施設 |
| 19 実験動物舎I | 41 温室 |
| 20 実験動物舎II | 42 メインパドック |
| 21 防災センター | 43 サブパドック |
| 22 講堂 | 44 実験圃場 |



区分	校地(m ²)	建物		
		建面積(m ²)	延面積(m ²)	
事務局	428,360	1,429	2,535	
校舎(事務室・教室・教員室・実験室・実験圃場・課外活動施設・その他管理関係施設等)		12,355	30,642	
講堂		968	1,067	
体育館		2,212	2,858	
かしわプラザ		1,115	1,346	
逍遥舎		130	130	
保健管理センター		268	268	
国際交流会館		771	2,175	
福利厚生施設		850	1,546	
講義棟図書館		2,332	4,783	
産業動物臨床施設群		6,825	8,724	
原虫病研究センター		1,282	3,118	
産学連携センター		786	1,347	
畜産フィールド科学センター		1,378,600	18,311	18,005
寄宿舍		12,490	1,751	5,362
運動場		65,025	-	-
合計	1,884,475	51,385	83,906	





帯広駅から本学まで

バスの時刻表・運賃等は十勝バスのホームページ等でご確認ください。 十勝バスHPIはこちら

帯広駅バスターミナル バス路線(十勝バス)	系統 番号	下車バス停	下車後大学 正門まで(徒歩)	所要 時間
大空団地線	70・72	緑陽高校前	約15分	約30分
環状線きた廻り	28	畜産大学入口	約10分	
畜大線	79	畜産大学前	約1分	

■ タクシー 所要時間/約20分 料金/約2,400円(約6.5km)

アクセスマップ



とち帯広空港から本学まで

■ 空港連絡バス とち帯広空港ー帯広駅バスターミナル
所要時間/約40分▶上記バスまたはタクシー

■ タクシー 所要時間/約30分

発行 令和5年8月

編集発行 国立大学法人 北海道国立大学機構 帯広畜産大学 広報室
TEL.(0155)49-5219
〒080-8555 北海道帯広市稲田町西2線11番地
<https://www.obihiro.ac.jp>

